

講義名	対)自己発見とキャリア開発 A (K14：月火クラス)			
担当教員	長坂 泰之			
開講期・曜日・時限	前期 月曜日 1時限 / 前期 月曜日 2時限 / 前期 火曜日 1時限 /	授業形態	演習	
履修開始年次	1年生	単位数	8	備考

主題と概要

流通科学大学では4年間の教育課程の初めに「気づきの教育」を置いています。気づきの教育の目的は、自発的で積極的な行動を伴う多数の経験を通して得られる様々な「気づき」から、一人一人の「なりたい自分(夢の種)」を授け、それに応じて本学での4年間の学びをより充実させ、意義あるものにする事です。「自己発見とキャリア開発A」は、「気づきの教育」の幹となる必修科目です。大学の学びや社会に出てからの基礎となる能力について、気づいて向上させます。職や学び、ならびにその関連性について自ら即して気づきます。それらを踏まえて、将来の夢や目標をつかみ、将来を見据えた「4年間の学びの道筋(キャリアビジョン)」を作成します。

到達目標

最終的な到達目標は「 」であるが、そのためには、「 」、「 」をしっかりと達成していることが大切で、6つの基礎能力の必要さに気づき、自分の現状を知り、向上させることができるようになる。また今後の継続的な向上のきっかけをつかんでおり、向上し続けることができるようになる。(6つの基礎能力とは、「コミュニケーション」、「発想力」、「グループワーク」、「気づき力」、「創造力」、「学び力」)。「職」、「学び」、「両者の関係性」について、自分自身に即して様々な気づきを得て、理解できるようになる。様々な気づきに基づき、自分自身に即して考えた上で、自分自身の将来の夢や目標を持ち、将来を見据えた「4年間の学びの道筋(キャリアビジョン)」を獲得できるようにする。

提出課題

講義資料に付属のワークシートを作成し、プログラムによっては、ポスターなどを作成します。これらは、直ちに提出する場合、宿題として提出する場合、学生本人が保管して随時教員がチェックする場合など、様々です。いずれにしても、皆さんの貴重な成果物となります。成果物は後のプログラムで使う場合があります。講義資料は最後まで絶対になくさないように十分に注意してください。

課題(レポートや小テスト等)に対するフィードバック

提出されたワークシートは、適宜返却して講評・解説します。その他のポスターやスライド等の提出物についても講評・解説します。

評価の基準

各プログラムへの取り組み姿勢と上記の - の到達目標が達成されたかどうかによって成績評価します。取り組み姿勢については、出席状況や取り組みの態度、積極性、真面目さなどで総合的に評価されます。到達目標が達成されたかどうかは、ワークシートやポスターなどの成果物で判断することになりますが、取り組み姿勢が適切であれば到達目標が達成されるようなプログラムになっています。ワークシート類には自らの気づきを十分反映させ、他者が見て分かる充実したものにして下さい。遅刻・欠席が多かったり、取り組み姿勢が適切でなければ、低い評価になったり、不合格になったりします。1/4以上の欠席は不合格になります。欠席が1/4より少くとも、取り組み姿勢が不適切であったり、成果物が不十分であったりすると、不合格になります。不合格の場合、専休みの場合への出席や、後期に特別の科目や追加の科目を履修する必要があります。遅刻や欠席、まじめでない取り組み姿勢は、自分自身が履修するだけでなく、クラスやグループの他のメンバーに迷惑をかけることになるので避けください。結果のところ、遅刻欠席を繰り返すまじしに出席し、積極的に各プログラムに取り組むことが、到達目標の達成に結び付き、高い評価を得ることにつながります。

履修にあたっての注意・助言他

この科目は必修科目であり、対面での授業で実施します。あらかじめ割り付けられたクラスで受講して下さい。「通学困難届」を提出した学生は、もとのクラスに所属しながら、月、火、水、金の6時間目に開講(予定)される「オンラインクラス」で受講していただきます。受講者に指定されるなど一時的に通学が禁止となった学生に対しては、LIVEでオンライン参加する、オンデマンドで動画を視聴して課題を提出するなど、プログラムごとに様々な方法で、元のクラスで対応します。「オンラインクラス」への移動は行いません。(1)本教員は、「この科目では様々な経験をすることが得意なこともあるだろう。失敗してもおまわらないので、積極的に取り組んでほしい。失敗から成長が生まれる。(2)周囲への配慮を忘れない。共に学ぶ仲間を尊重しよう。そして、自分の取り組みをからかつたり、私語や迷惑をかける行為はやめよう。また、フィールド演習などで外部の人と接し、卒業生や企業人をお招きすることもある。普段から言葉遣いやマナーに注意して、社会人としての振る舞い方を身につけよう。(3)遅刻・欠席は履修・自分自身が履修するだけでなく、グループの他のメンバーに迷惑をかけることになる。(4)遅刻・欠席は履修・自分自身が履修するだけでなく、クラスやグループの他のメンバーに迷惑をかけることになる。(5)分からないことがあれば、授業中に担当教員に遠慮なく相談すること。

教科書									

プリント資料及び参考文献

資料は各プログラムごとに配布します。多数の資料があるので、きちんと整理して保管してください。

授業計画

シラバス作成時点での予定であり、実際の学習計画とは少し異なる可能性があります。クラスミーティング実施時に詳細な計画を配布します。「通学困難届」を提出した学生は、もとのクラスに所属しながら、月、火、水、金の6時間目に開講(予定)される「オンラインクラス」で受講していただきます。受講者に指定されるなど一時的に通学が禁止となった学生に対しては、LIVEでオンライン参加する、オンデマンドで動画を視聴して課題を提出するなど、プログラムごとに様々な方法で、元のクラスで対応します。「オンラインクラス」への移動は行いません。

Stage1 クラスミーティング、(1)コミュニケーションキャンパス、(2)建学理念講義、(3)オリエンテーション、(4)大学での学び、(5)キャンパスツアーとキャンパスライフ

Stage2 (6)図書館活用演習、(7)中内功記念館・ダイエー資料館講座、(8)キャンパスツアー講座、(9)コミュニケーション演習、(10)担当クラス独自プログラム

Stage3 (11)資格特別プログラム講座、(12)職の気づき(全体講話)、(13)先輩との交流、(14)大学人との交流、(15)職業人との交流、卒業生との交流、(16)適性検査活用講座、(17)職業人との交流、地域と関わる職業人、(18)コミュニケーション演習、(19)職業人との交流、企業人との交流、(20)クラス縦断プログラム、(21)国際交流プログラム

Stage4 (22)フィールド演習、(23)働く意味(講話)、目標設定(講話)、(24)先輩との交流、(25)なりたい自分に向けての行動計画、(26)ポートフォリオ作成講座、(27)クラス縦断プログラム

Stage5 (28)ポートフォリオ、目標設定スライド作成、(29)個別面談、(30)成果のまとめと発表・今後の課題、(31)「自己発見とキャリア開発」・後期に向けて

授業形態(アクティブ・ラーニング)

ア: PBL(課題解決型学習)	イ: 反転授業(知識習得の要素を授業外に済ませ、知識確認等の要素を教室で行う授業形態)
ウ: ディスカッション、ディベート	エ: グループワーク
オ: プレゼンテーション	カ: 実習、フィールドワーク
キ: その他(A-L型であるけども、以上の項目のいずれにも該当しない場合)	

準備学修(予習・復習等)の具体的な内容及びそれに必要な時間

1回の講義について、学期ならびに文部科学省の大学設置基準においては、4時間の自己学習が必要とされています。したがって、この科目は1週間に4回の講義があるので、規則上は1週間に16時間の自己学習が必要とされていることとなります。自プログラムごとに作成するワークシート、振り返りシートなどは、宿題とされる場合もあります。フィールド演習の取りまとめなど、グループで授業時間外に打ち合わせや作業をする必要があります。ただし、ここで強調しておきたいのは、気づきの教育の目的を達成するには、このような科目の評価に備わる予習・復習だけしておけばよいのではないことです。この科目で身に付ける「体験から学ぶ」という態度は、学生生活の様々な場面で生かせるはずで、学生生活のあらゆる場面で「学び・気づき」の場として活用していただくことを、願っています。このような活動も、広い意味での「授業時間外学習」と言えるかも知れません。

卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目の関連

この科目の修得で、向上し続けることができるようになる6つの「基礎能力」と、本学の学生が卒業時に共通して身につけておくべき資質・能力5項目は次のように関連しています。コミュニケーション力、「常識力」、「学び力」の向上は「ネアカのひのびへこたれず」の精神を持った人材に繋がります。「気づき力」と「学び力」の向上は「知識を知識に転換することができる、論理的思考力を持った人材」に繋がります。「気づき力」と「創造力」の向上は「創造力(新しい視点や発想を持った人材)」に繋がります。「コミュニケーション力」、「グループワーク」、「気づき力」、「創造力」の向上は「自主・自立の精神を持った人材」に繋がります。「コミュニケーション力」と「グループワーク力」の向上は「仲間と協同して、物事を成し遂げることができる人材」に繋がります。

双方向授業の実施及びICTの活用に関する記述

この授業の運営は、ほとんどのプログラムのほとんどの場面においても、学生間ならびに、学生・教員間の相互啓発的な刺激の下に行われます。常に双方向授業として行われます。

実務経験の有無及び活用

この授業の担当教員の中には実務経験のある教員も多くなります。実務経験のある教員は、折に触れ自身の経験を伝える機会を設け、学生がこの科目の目標を達成するための援助をします。

備考